資料２－１

地方制度調査会専門小委員会
説明資料

平成30年10月25日

宮城県女川町長　須田善明

おながわちょう
女川町
ONAGAWA TOWN

あたらしいスタートが世界一生まれる町へ。

START! ONAGAWA

■大震災における女川町の被害

被災後の女川町中心部地区

被害の状況

震災時人口	犠牲者・不明者数	犠牲率
10,014 人	８２７人	8.27%

震災時建造物数	全壊・流出	その他被害	被災率
6,511 棟	4,316 棟	1,241 棟	85.35%

被災後の女川町漁業集落地区（桐ケ崎）

東日本大震災における
被災率最大の自治体が女川町

■女川町復興計画

【基本目標】**「とりもどそう　笑顔あふれる女川町」**

【計画期間】 **8年間（復旧期2年、基盤整備期3年、本格復興期3年）**

【復興方針】

五本の柱

震災の教訓を忘れることのないよう
「安心・安全な港町づくり《防災》」

基幹産業である水産業を中心に、新しい視点や試みを取り入れた
「港町産業の再生と発展《産業》」

安全で暮らしやすい場所での生活再建を最優先にした
「住みよい港町づくり《住環境》」

こどもから高齢者まで誰もが安心して暮らせるための
「心身ともに健康なまちづくり《保健・医療・福祉》」

町の発展を支えるための
「心豊かな人づくり《人材育成》」

最優先課題は
当たり前ですが

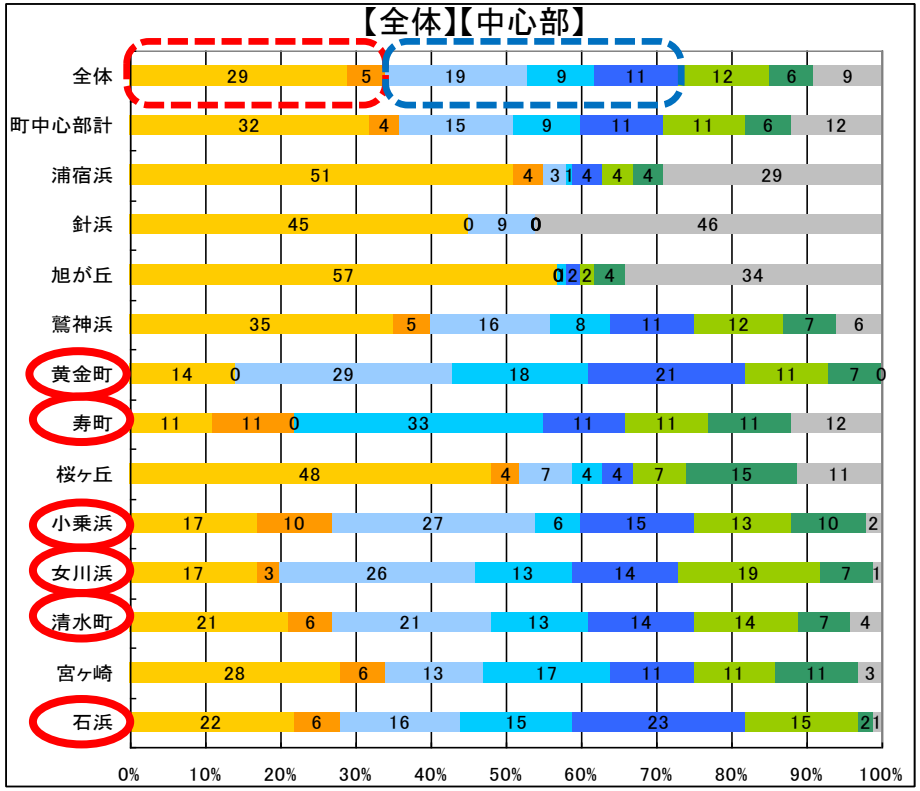
住居確保
と
産業再生

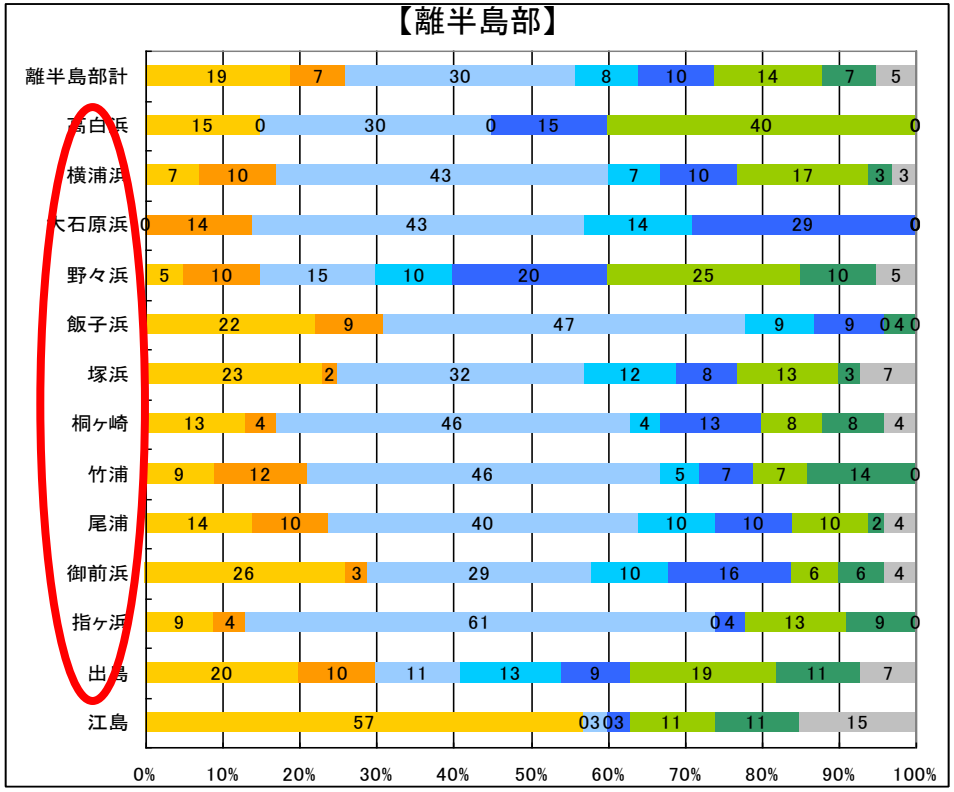
■住民アンケート結果（第1回）

○調査期間：平成23年8月22日(月)～9月2日(金)
○調査対象：全世帯
・配布数：3,510部　　・回収数：2,146部（ 61.1%）
〔 うち「全壊・流失」「大規模半壊」「半壊」世帯：1,574世帯（回収数の73.3%）〕

○調査内容
・自宅の被害状況、建物・土地の所有状況
・住宅の再建意向（場所、住宅形態・土地所有）
・就労状況、就労希望、等

被災前住所別の住宅再建希望場所

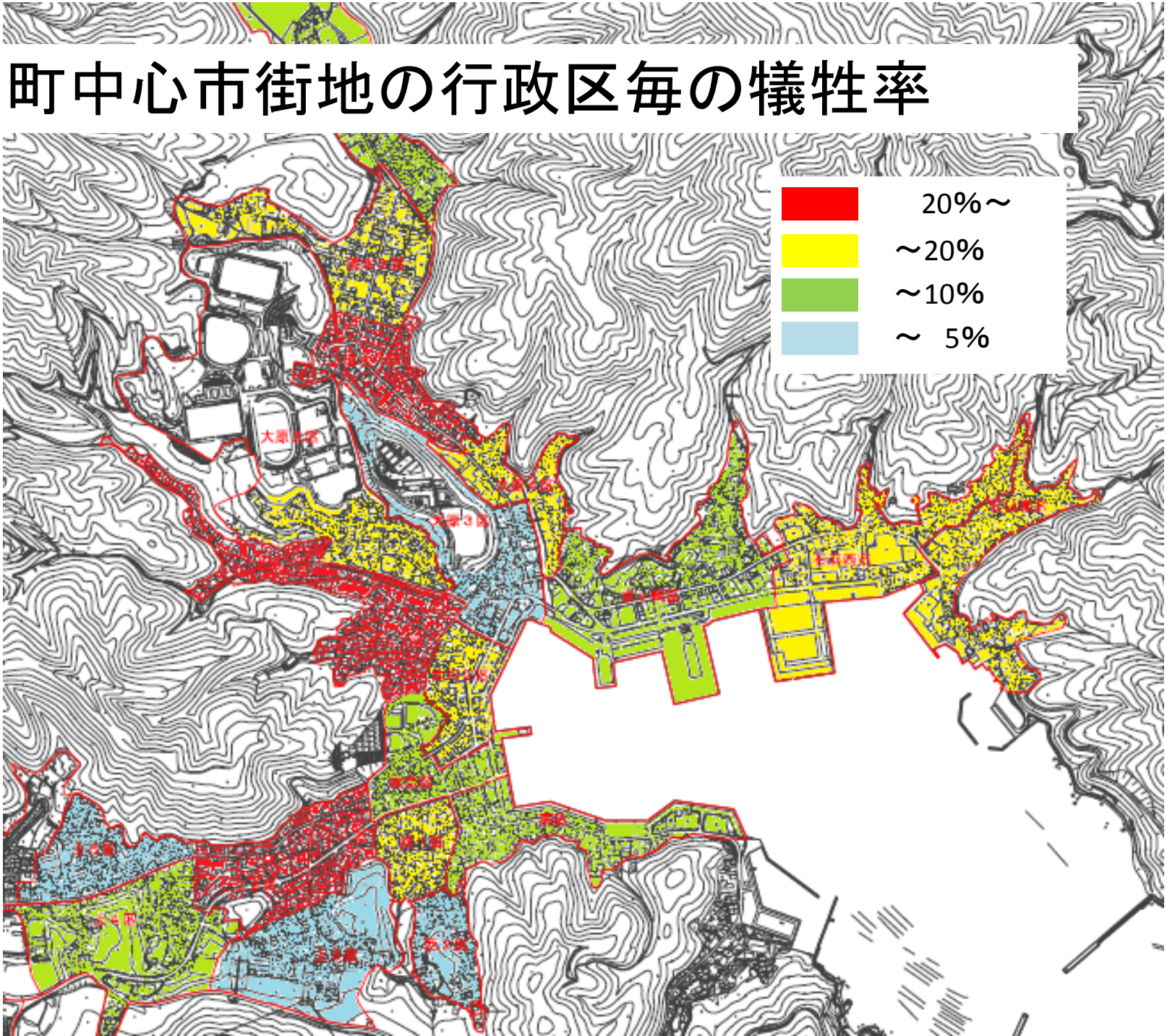




震災前と同じ居住地
震災前と同じ地域
震災前の居住地近くの安全な高台
町中心部の安全な高台
安全な高台（場所はどこでも）
女川町外
その他
無回答

N=2146

■町中心市街地の行政区毎の犠牲率



■復興（都市構造）における基本コンセプト

中心部地区の都市構造と人の流れイメージ

まちの「へそ」に都市機能を配置し拠点化

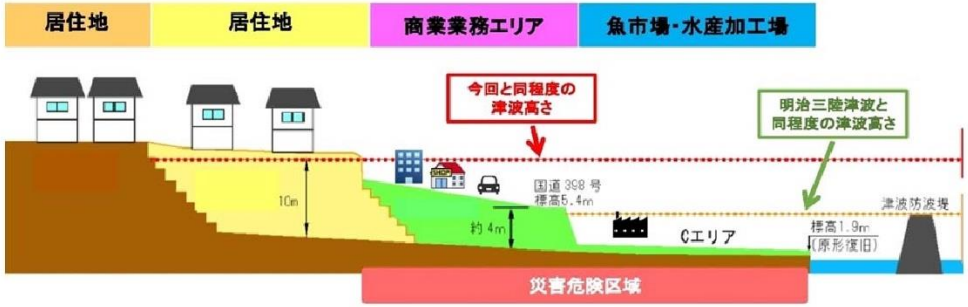
人の流れを意識的に「へそ」へ集約し

人口減少でも活力を維持・創出

将来も含めた人口減少を見据えた

都市構造

海側から三段構造となる断面地形



ひな壇構造にすることで海への視界を確保

「減災」と「海の町」の意識を両立

■住まいの復興状況

●宅地・住宅の供給

▲災害公営住宅（女川住宅　平成29年７月完成）

▲防集宅地・災害公営住宅
（宮ヶ崎地区　平成29年10月全面供用）

防災集団移転促進事業宅地・災害公営住宅 引渡し率

平成30年9月末

98.9%

※ 防集宅地引渡し率
96.3%（340戸/353戸）
災害公営住宅引渡し率
100%（859戸/859戸）
換地引渡し率
96.6%（421戸/436戸）

▶**宅地供給は、概ね完了。**
（現在造成中の堀切山・小乗浜(換地)は、平成31年1・2月に供給予定）

▶**災害公営住宅は、全て完成(平成30年3月末)。**

▶**応急仮設住宅は、本年度に集約化し、順次解体予定。**

●応急仮設住宅

▲3階建ての野球場仮設住宅

入居率

平成30年9月末

3.9%

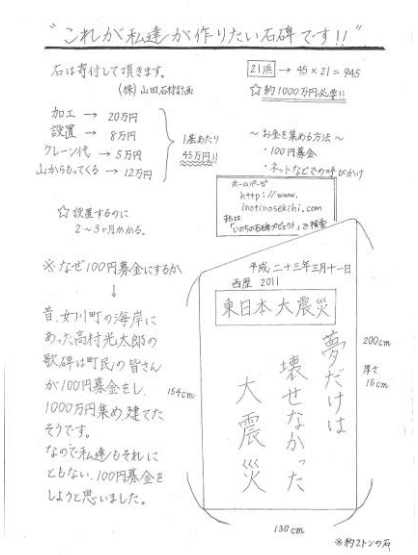
（50戸／1,285戸、65人）

※世帯換算　2.3%
※分母の戸数は当初建設戸数。

この他に民間アパート等への仮住まいが町内外計 24世帯
（平成30年8月末）

▲女川駅周辺の住宅
（左から、防集宅地（女川南区）、災害公営住宅（女川住宅、大原住宅、運動公園住宅）

■津波災害とその時の行動をどう伝えていくか



いのちの石碑プロジェクト　～有形の伝承～

【石碑全文】
東日本大震災で、多くの人々の尊い命が失われました。地震後に起きた大津波によって、ふるさとは飲み込まれ、かけがえのないたくさんの宝物が奪われました。
「これから生まれてくる人たちに、あの悲しみ、あの苦しみを、再びあわせたくない！！」その願いで、「千年後の命を守る」ための対策案として、①非常時に助け合うため普段からの絆を強くする。②高台にまちを作り、避難路を整備する。③震災の記録を後世に残す。を合言葉に、私たちはこの石碑を建てました。

ここは津波が到達した地点なので、絶対に移動させないでください。
もし、大きな地震が来たら。この石碑よりも上へ逃げてください。
逃げない人がいても、無理やりにでも連れ出してください。
家に戻ろうとしている人がいれば、絶対に引き止めてください。

今、女川町はどうなっていますか？
悲しみで涙を流す人が少しでも減り、笑顔あふれる町になっていることを祈り、そして信じています。

2014年3月　女川中卒業生一同

■津波災害とその時の行動をどう伝えていくか

津波伝承　女川復幸男
～無形の伝承～

震災以降、毎年3月に行われる復幸祭の際、大津波が到達した時刻である午後3時32分に「逃げろ~！」の掛け声とともにスタートし、高台を目指して駆ける競争。1着から3着までを復幸男に認定し、一番復幸男は、震災がれきの中から奇跡的に見つかった「きぼうの鐘」（震災前の旧女川駅前にあった鐘で、がれきの中から奇跡的に見つかった）を鳴らす。第3回より、西宮神社様から公認をいただく行事となった。

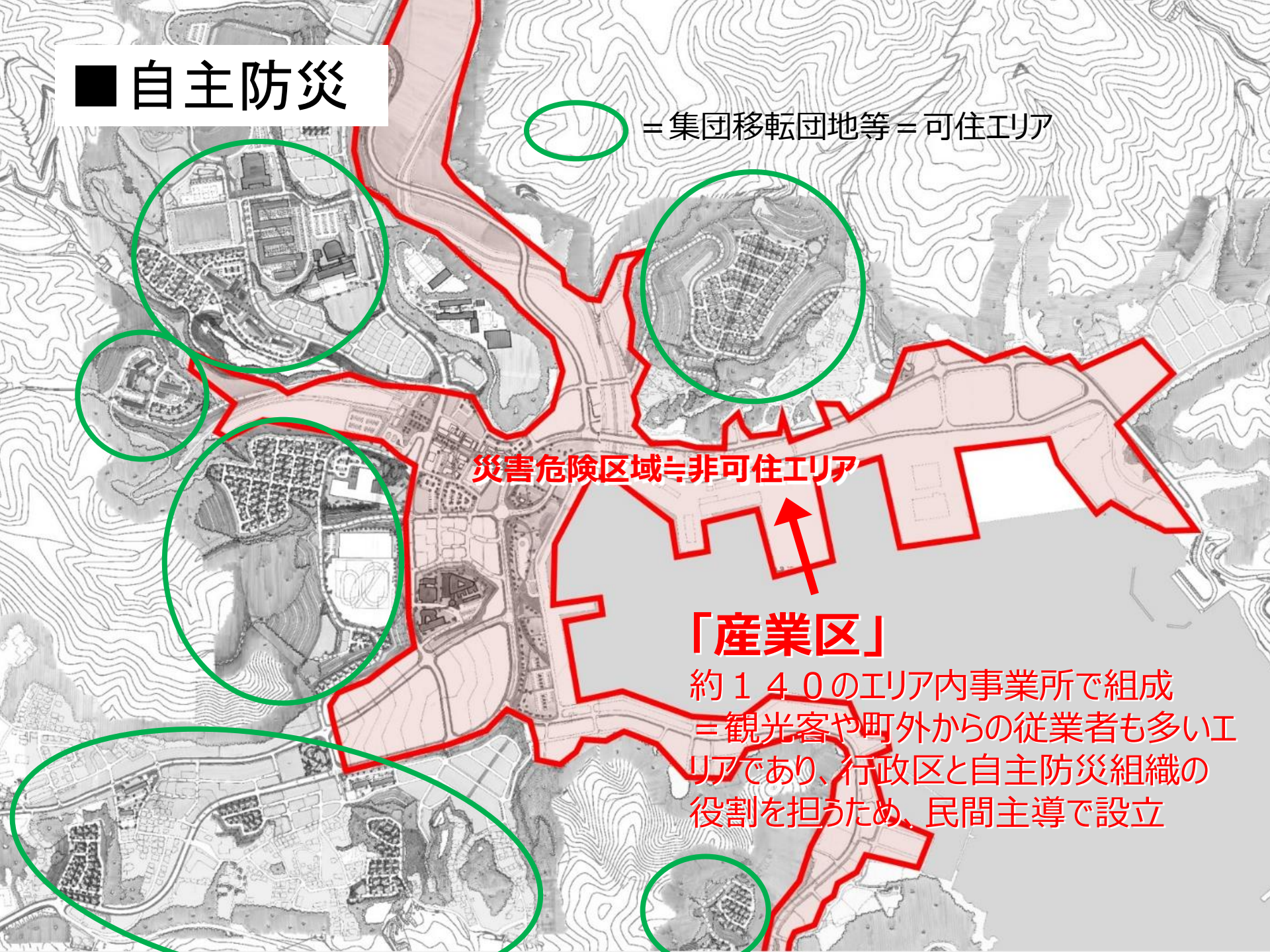
「大事なことを後世に伝える手段として、古来より日本人は祭りの形をとって伝えてきた。最初は奇をてらったイベントと思われても、100年続けば立派な伝統。」 ~発案者（言い出しっぺ）の言葉

【第１回　平成２５年３月】

【第５回　平成２９年３月】

【第６回　平成３０年３月】

■自主防災


＝集団移転団地等＝可住エリア
災害危険区域≒非可住エリア
「産業区」
約１４０のエリア内事業所で組成
＝観光客や町外からの従業者も多いエリアであり、行政区と自主防災組織の役割を担うため、民間主導で設立